

福岡・観世音寺
かんぜおんじ

1 所在地 福岡県太宰府市大字観世音寺字堂廻

2 調査期間 大宰府史跡第一〇九・一一一二次調査 一九八七年

(昭62) 七月～一九八八年四月

3 発掘機関 九州歴史資料館

4 調査担当者 石松好雄・高倉洋彰・横田賢次郎・森田 勉・

赤司善彦

5 遺跡の種類 寺院跡

6 遺跡の年代 九世紀～一六世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(太宰府)

調査地は、観世音寺南門の前面地域にあたり、現参道の西側の部分である。北半部を第一〇九次調査、南半部を第一一一一次調査とし、二回に分けて発掘調査を実施した。調査面積は、第一〇九次調査が一七九〇㎡、第一一一一次調査が一四八

〇㎡である。

調査の結果、掘立柱建物二棟、柵一条、井戸一九基、多数の溝・土坑・ピットなどの遺構を検出した。遺構の時期は大きく第Ⅰ～Ⅲ期に分かれる。第Ⅰ期は九・一〇世紀で、遺構は井戸SE三一五〇のみである。第Ⅱ期は二つの小期に分かれ、Ⅱ－Ⅰ期は一一・一二世紀、Ⅱ期は一三世紀前半である。この時期の遺構は東西溝SD三三〇〇の南側に集中する。土坑SK三二九五は一一・一二世紀の土坑で、平面は楕円形を呈し、長軸四・〇五m短軸二・六m、深さは一・一五mを測る。埋土からは多くの鋳型片が出土した。周辺からも多数の仏像・仏具類の鋳型が出土しており、鋳造工房の存在を窺わせる。第Ⅲ期は三つの小期に分かれ、Ⅲ－Ⅰ期は一三世紀後半、Ⅱ期は一四世紀、Ⅲ期は一五・一六世紀である。第Ⅲ期には大きな画期がみられる。この時期になって、東西溝SD三三〇〇の北側に溝や柵で囲まれた建物や井戸・土坑などが出現し、徐々に増加して一四世紀に最盛期を迎える。

以上から、第Ⅰ期ないしそれ以前には建物が存在せず、南門前面の地域が空地であったこと、第Ⅱ期にはSD三三〇〇を境として南側に遺構が集中しており、第Ⅲ期になって北側に遺構が出現することから、この溝によって何らかの規制を受けていたことがわかる。今回の調査では古代の観世音寺と関係する遺構は少なかったが、SD三三〇〇が第Ⅱ期における観世音寺境界であったことを示してい

る。また、調査区東端で検出した南北溝SD三二〇〇は、調査区北端で幅四・五m、南端で九mと南側に向かって広がる。深さは〇・七mを測る。出土した嘉元二年（一三〇四）銘の木簡などの遺物からみて一四世紀の遺構であり、現在の参道と並行していることから、調査区東側で実施された第一三〇次調査検出の南北溝SD三八四〇と対をなす、中世観世音寺の参道の西側溝と考えられる。

木簡は、調査区東端で検出した南北溝SD三二〇〇から七点、調査区南端中央で検出した一一・一二世紀の土坑SK三二九五から一点、計八点が出土した。

8 木簡の釈文・内容

SD三二〇〇

- (1) ・「^{キリク} 若人求仏^{井カ} 通達并心^{井カ} 父母所生^{身カ} 速^{大カ} 大覚^{大カ}」
 ・「嘉元二年十一月卅日」
 (354)×52×6 061
- (2) 「南無阿弥陀仏」
 (262)×17×4 061
- (3) ・「種種因縁 以無量論 照明仏法 開悟衆×」
 ・「如是等施 種種微妙 歡喜無厭 求×」
 (142)×16×1 019

(4) ・「華光仏所為 其事皆如是 其兩足聖尊 最勝無倫匹

・「利弗 若国邑聚落 有大長者 其年衰邁 財富 (175)×17×1 019

(5) ・×遊戲汝等於此

・×当与汝尔時諸 (97)×14×1 081

(6) ・×薩無数 志固精進 於仏智慧 皆不退転

・×其数不 不也世尊 諸比丘 是× (137)×16×1 081

(7) ・□□□□ 當

・於喜□□□□ (62)×16×1 081

SK三二九五

(8) 「南无□□×」 323×33×3 061

(1)は卒塔婆である。上端は圭頭状に作り、左右から三段ずつ切り込みを入れる。左右両辺は削り、下端は折れである。一段目の切り込みより上部には墨を塗っている。表面の梵字はキリクで、阿弥陀如来の種子である。その下位は類例から願文と推定される。裏面の嘉元二年は一三〇四年にあたる。その下位には二行からなる墨書があり、施主などの名が記されていたのであろうが、わずかに一文

字が推測されるのみで、判読できない。(2)は板塔婆である。板目材。上端は圭頭状に作り、左右から二段ずつ切り込みを入れる。左右両辺は削り、下端は斜めに切断しているが、二次的かどうかは不明である。いわゆる称名である。

(3)は柿経で、妙法蓮華経、すなわち法華経の経文を写したものである。(3)は下端が折れている以外は原形をとどめる。表面は序品第一の一節で、巻第一の第八四行(以下、行数は大正新脩大藏經による)にあたる。裏面は同第一一七行である。(4)は下端部を若干欠損するが、他は原形をとどめている。表面は譬喻品第三の一節で、巻第二の第八五行にあたり、裏面は同第一一六行である。(5)は上下両端を欠損する。左右両辺は原形をとどめる。現状で中位以下が空白であり、行末部であることを示している。巻第二の第一四〇・一四一行に相当し、表裏の内容は連続する。(6)は上下両端を欠損する。左右両辺は原形をとどめる。表面は授記品第六の一節で、巻第三の第二三行にあたりと推定される。裏面は化城喻品第七の一節で、巻第三の第二二七行である。(7)は上下両端を欠損する小片。ごく一部の文字しか判読できないので、具体的な経文を比定できていない。表裏も判別できない。

柿経は一〇〇葉を一単位とする(3)(4)、一〇葉を一単位とする(6)、表裏面が直接に連続する(5)の三通りが存在する。これらが別の柿経であるのか、一連のものであるが、途中で配列方法が変更されたも

のであるのかは不明である。

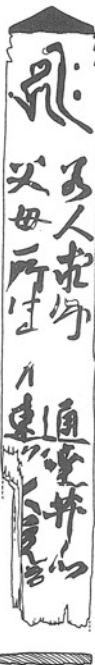
(8)は板塔婆。板目材である。上端は圭頭状に作り、左右から二段ずつ切り込みを入れる。左右両辺及び下端は削りである。

9 関係文献

九州歴史資料館『大宰府史跡昭和六三年度発掘調査概報』(一九八九年)

同『観世音寺―寺域編―』(二〇〇六年)

(酒井芳司)



(1)



(2)



(8)